

## 最後の祈り

### 創世記48章1～22節

47：28節「ヤコブはエジプトの地で17年生きた。ヤコブが生きた年月は147年であった。」

(48：1～7節)、

1節「これらのことの後、ヨセフに『お父上が、御病気です』と告げる者があったので、彼は二人の息子、マナセとエフライムを連れて行った。」

父ヤコブは高齢でもあり病気になりました。ヨセフは2人の子供（20歳になった頃の）マナセとエフライムを連れてお見舞いに行きました。

(5節、読む) さてこの所で、ヤコブはエフライムとマナセとが孫であるにもかかわらず、この2人を自分の子供（養子）として受け入れるのです。

もともとヤコブには12人の男子がいましたが、レビとヨセフは除かれて、その代わりにヤコブにとっては孫ですが、エフライムとマナセが加えられました。その理由ですが、

——— 12部族にエフライム、マナセが  
加えられた理由 ———

① レビについて、申命記10：8、9節「・・・主はレビ族を選り分けて、主の契約の箱を運び、主の前に立って仕え、また御名によって祝福されるようにされた。今日までそうである。それゆえ、レビには兄弟たちと同じようには相続地が割り当てられなかつ

た。あなたの神、主が彼について言われたように、主が彼へのゆずりなのである。」この様にレビは、地上のことから離れて、直接神に関わる宗教上の奉仕にのみ専念する様に導かれました。

② ヨセフについて、彼はエジプト人になってしまった、と言っても良いでしょう。ですから、本来ヨセフが次ぐべきであった相続地を父に代わってその子たち（エフライム、マナセ）につがせることになりました。

この様な理由でレビとヨセフは12部族から除かれて、その代わりにヨセフの子のエフライムとマナセが加えられました。その結果、丁度12人（2人削られ、2人加えられて）になりました。後にこの12人が、12部族となって約束の地を分け合う事になるのです。

さて、ヨセフはイスラエルの地に名を残すことは出来なかったのですが、その代わり彼の子供のエフライムとマナセがその地を受けることになるので、ヨセフは2人分を得ることになりました。そういう意味で彼は、他の10人よりも多くの祝福を（2倍の祝福を）得るようになったのです

———— 目がかすんでいたイス

ラエル ———

（48：8～22節）

8、9節、「イスラエルはヨセフの息子たちに気づいて言った。『この者たちはだれか』ヨセフは父に答えた。『神がここで私に授けてくださった息子たちです。』すると、父は『私のところに連れて来なさい。彼らを祝福しよう』と行った。」ところがです。

10節。「イスラエルは老齢のために目がかすんでいて、見るができなかった。」ヤコブはあらゆる面で肉体の限界に達していました。特に、目がかす

んできていました。しかし、神を信じているヤコブの素晴らしいことは、肉の目が見えなくなって来ても、霊の目は開けて、今まで以上に神の御旨と神の恵みとに敏感になって来ているということです。

第2コリント4：16節「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」

——— 弟エフライムを兄マナセの先にした ———

そんなヤコブはまずヨセフを祝福しました。15節「彼はヨセフを祝福し」ました。そして、更にヨセフの子の2人を祝福しようとしてしました。ところがその時でした。何と、

14節「・・・イスラエルは、右手を伸ばして弟であるエフライムの頭に置き、左手をマナセの頭に置いた。マナセが長子なのに、彼は手を交差させたのである。」それを見て、ヨセフは父が間違っていると思い注意しました。しかし、父はエフライムを祝福しました。

(48：19節、読む) 皮肉です。目の見えているヨセフが神の御旨が見えず、目の見えなかったヤコブが神の御旨をはっきりと見ているのでした。人間のレベルでの祝福と、神様のレベルの祝福とは違います。

こうして48：20B 「・・・こうして彼はエフライムをマナセの先にした」

ヤコブは間違えませんでした。この様にして、神の業を行ったのでした。実際にこの後に、エフライムは北王国の中心的な部族として繁栄します。エフライムはエフライムなりに祝福され、マナセもマナセなりに、マナセの分に応じて祝福されたのです。人

にはそれぞれタラントがあります。私たちそれを知らなければなりません。

## ——— 死を間近にしたヤコブ

### の生き方 ———

さて、この48章の所で、非常に感動させられることがあります。それは、イスラエル（ヤコブ）、の臨終を前にした生き生きとした生き方でした。

3節「・・・イスラエルは力を振り絞って床の上に座った。」でも、ヤコブは2人共、祝福したのです。

年をとっても、衰弱していても、神の使命を果たすためにイスラエル（ヤコブ）は残された人生を全力で生きようとしています。今、彼は死を前にして全力投球をしています。そして、イスラエルは神からの使命を果たすため、次の事を行いました。

イスラエルが最後の力を振り絞って行ったこと。幾つかありますが、2つ学びましょう。

① 後に続く者への**祝福の祈り**でした。聖書には15節「彼はヨセフを祝福して言った」と書かれています。更に

16節「・・・この子どもたちを祝福してくださいませように。」とも書かれています。

今、ヤコブがいよいよこの世から離れ、子供たちからも別れようとしている時、彼が最後に親としてなさなければならぬこと、それは神の祝福を与えるということ、祈ることでした。「子孫のために美田（びでん）を買わず」の言葉の真意を理解すべきですね。子供たちへ遺産として残すべきもの、神の祝福の祈り以上のものはないはずです。

② **自らが歩んできた証**でした。

それは、（3, 4節）神様から祝福されたことの証で

した。

(15節) 彼は「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神よ。今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神よ。すべてのわざわいから私を贖われた御使いが、・・・」と言い、アブラハムとイサクは神様のみ前をしっかりと歩んだが、それに比べて自分は生涯迷える羊であった。それにもかかわらず神様はこんな私を顧みてくださったと感謝しています。この砕かれた心こそが彼が祝福を受けた資格でした。確かにヤコブは若い時は高慢であり多くの過ちを犯しました、でもそんなヤコブを神様は見捨てないで、じっと見つめておられたのです。ヤコブはこんな自分に常に最善をなしてくださった神様に感謝しています。

第2テモテ2：13節「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。」

神様の体である教会の歩みは常に罪に汚れていたかも知れませんが、しかし、その頭（かしら）である神、キリストは間違っただけではありませんでした。

私に真実を尽くされた神様は、後に続く者（子供、孫たち）にも真実を尽くされるお方です。私たちも後に続く者のために祈りましょう。恵みの神様を後輩たちに伝えましょう。私たちの信仰は、私たち一代で終わらせてよいものではありません。後の世代に伝えなければならないのです。

最後に1つのお話をします。

ひとりのおばあちゃん熱心に教会に通っていました。このおばあちゃん日々、聖書通読に励んでいます。そんなある日、婦人の集会で聖書暗記大会がありました。一週間かけて詩篇23篇を覚えて来て

発表するのです。おばあちゃんも一生懸命覚えて来ました。ところが何と、当日当てられてしまいました。何とか「主は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません。・・・」ここまでは良かったのですが、後はもぐもぐと口を動かすだけで出て来ません。最後におばあちゃん、たった一言。「もうこれで充分です。主よ、感謝です、ありがとうございます。」おばあちゃんの目には涙が光っていました。